

ローマの信徒への手紙 6章9節～14節　そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです

パウロは、「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」と、キリストの十字架と共に自分の罪に死に、キリストの復活と共に、神の新しい命に生きると語った。キリストの十字架と復活が生まれ変わりを約束する救いであると説いた。そして、死者の中から復活させられたキリストは死ぬことはなく、死はキリストを支配しないと言う。神によって復活させられたキリストは永遠の命に生き、有限な死とは関わりのない神御自身であるからである。

キリストが十字架で死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれた。罪を葬るために、罪に対してただ一度、死んだのである。復活して生きておられるのは、永遠の命に与って、神に対して生きていたのである。「このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」キリストを信じる者には、キリストの十字架と復活の出来事が、そのまま、自分の身に起こっている。パウロは「キリストにある」という言葉をしばしば使って、キリストにある者はキリストと同じように、罪に死に、神に対して生きる者とされていると告げている。

そのような救いをいただいているのだから、「あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません」と説く。罪が増したところに、恵みが満ち溢れるならば、恵みをいただくために、体の欲望に従う罪に支配させてはならない。「あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。」そうではなく、「自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。」あなたがたは、律法の下で罪に支配されるのではなく、赦しと義に与る恵みの下で、神に対して生きているからである。

パウロの語る福音の核心は「信仰義認」であった。行いによってではなく、信仰によって神から義が宣告され、神と共に生きる者とされる。この信仰は、宗教的戒律を厳格に守り、多大な自己犠牲を負うことではなく、イエス・キリストの真実（十字架と復活）が全ての人を「あるがまま」に義とし、絶対的に是認されているという解放である。これを聞いたある人々は、何をしなくても救われるのであれば、こんな安価な信仰はないと、パウロの信仰を嘲笑った。しかし、パウロの真意は、そうではない。義とされ、神の命に生きる者は、自分の体を不義のための道具にしない、義のための道具として神に献げる者となる。義認は聖霊によって聖化へと高められていくのである。